



# プレイドゥ 通信

2024年3月25日発行

発行者：NPO 法人日本プレイ  
センター協会理事長  
佐藤 純子  
無断複製はご遠慮ください。

## 佐藤純子理事長ごあいさつ

ようやく春が近づいてきました。皆さま、お変わりなくお過ごしでしょうか。年始には、能登半島地震が起き、いかに日々の何気ない生活が大事かと感じたお正月でした。皆さまもご家族、身近な人々、プレイセンターをはじめとする地域の仲間とのつながりの重要性について、意識されたのではないのでしょうか。また、プレイセンターの絆を大切にしながら、お互いを支えあうプレイセンター活動の意義を改めて感じたことでしょうか。

以下、冬から春にかけて協会が開催した諸事業についてご報告いたします。

2024年1月21日（日）に、スーパーバイザー養成講座を実施しました。松戸会場（佐藤在駐）、小平会場（足立在駐）の2会場体制を採り、オンラインも同時に行うスーパー・ハイブリットともいえる形式で実施しました。松戸会場の受講者6名、小平会場4名、オンライン受講2名の合計12名の受講がありました。また、流通経済大学の学生2名も受講しました。

松戸会場のお昼休みには、次年度からプレイセンターを開催予定である「RKU 常盤平団地コモンズステーション」にて、近隣親子とともにピザやお菓子を食べながら交流会も実施しました。学生による読み聞かせなども行いました。当日は、あいにくの雨天で、乳幼児親子の参加は少なかったものの、自治会や地域の方の参加もあり、「常盤平地区が若者の声で賑わうことは嬉しいことです」との感想が寄せられました。今後、3月25日10:00~12:00には、「プレ・プレイセンター」を企画し、プレイセンターの遊び体験会を実施予定です。関東地区のプレイセンターの皆さま、ぜひ、お手伝いや遊びに来るなど駆けつけていただけたらありがたいです。

ここ数年、プレイセンターの参加者層が変化しております。参加者のメイン層は、低年齢児の親子になっておりますが、昨今では就労子育て世帯が増え、今後は、幼稚園親子や保育園親子も参加できる「プレイセンターの新たなかたち」を築いていかないと考えております。今年2月には、福岡県の学校法人八女学院 広川幼稚園にて「プレイセンターてくてく」が始動しました。「プレイセンターオカピ」に引きつづき、第2号の幼稚園内での実施となります。モデルケースとして今後も注目していきたいと考えております。

3月13日のスーパーバイザー交流会では、上記の問題意識からプレイセンターの実施のあり方をテーマとして話し合いをしました。ぜひ、この局面を各地のプレイセンター同士で支え合い、乗り越えながら、2024年度も楽しく、プレイセンター活動を実践していきましょう。

今年度もありがとうございました。よき、新年度をお迎えくださいませ。



## ★★★ 次世代SVを育てる ★★★

SV(スーパーバイザー)はプレイセンター活動の一つの柱です。みなさんのプレイセンターでは、どんな風に次世代SVが育っていますか？

今回は一つの事例として、NPO法人体験ひろば☆子どもスペース四日市 の上田 真紀子さんに、お話をうかがいました。長い活動のなかで蓄積された思いと手法に、上田さんの魅力も相まって、これから機会あるごとにお話しをうかがいたいなあ！！と思いました。

---

### NPO法人体験ひろば☆子どもスペース四日市 理事長 上田 真紀子さん

#### 1. 子どもスペースとの出会い、そしてプレイセンター立ち上げへ

結婚と同時に見ず知らずの地、四日市にきて、母親になったのが25年前。絵にかいたような孤育ての日に息苦しさを感じる中で、自分と子どもの居場所として出会ったのがNPO法人体験ひろば☆子どもスペース四日市（以下、子どもスペース）でした。

当時、子どもスペースでは子育て支援に取り組み始めたばかりで、子育てを助けてあげるのではなく、親と子が共に成長する自立支援を目指して模索中でした。そんな中で、2002年に前理事長らがNZの子育て支援施策視察で出会ったのがプレイセンターです。自立支援型の子育て支援事業として、また乳幼児の体験事業として、プレイセンターにぜひ取り組もうということになりました。

事業を始めるにあたって、『支援者が「プレイセンター」というカタチを作り、親が利用しにくるだけでは、自立支援にはつながらない。NZのプレイセンターの歴史をたどるように、必要とする親が集まり、運営を体験し理念を学んで、その仕組みを立ち上げてこそ、自立につながる』という思いから、準備会を立ち上げました。私は、一母親としてその準備会に参加。自分の考えを他人に伝えること、目的に向かって進むこと、他人の子どもの世話をしたりされたりすること、そして、権利を持つ主体者として子どもをとらえること…。準備会では、たくさんのことを学びました。

そして、2005年プレイセンターが本格始動。私はその運営委員長として4年間活動し、その後は子どもスペース常任理事として活動を支えてきました。

日本プレイセンター協会のSV資格の取得を通じて学ぶことで、プレイセンターの理念や遊びの素材の意義や運営のスキルについて再認識し、日々の運営を客観的にとらえる力がつきました。今も、迷えば立ち返れる基本として私を支えてくれています。

#### 2. プレイセンターの魅力

子どもにとって遊ぶことは生きることそのものです。プレイセンターで自分の意志で自由に遊ぶことを保障されることは、これから先の人生が自分のものであることを実感できる大切な機会です。生きる力は、子ども自身の中にある。プレイセンターで育つ子どもたちに、そのことをずっと教えてもらってきました。

そして親にとっては、プレイセンターは「子どもが自由に遊ぶ場を、親が保育者として保障する」活動です。これは言うのは易しいけれど、実行するのは本当に難しいものです。

親は無意識に、自分のイメージする枠の中で「子どもが自由に遊ぶ」ことを求めています。自分の気持ちと子どもの気持ちを一体化してとらえていることもよくあります。

育つ子どものそばで、親は仲間と共に自分の先入観や不安を分かち合い、ひとつずつ手放していきます。プレイセンターは、親もまた自分の力で育つ場です。

子どもも大人も、自分の力で育つことができるのがプレイセンターの一番の魅力です。そして、

その実感は活動を卒業した後の人生まで支えるものとなると思います。

### 3. 現在のプレイセンター運営体制～SV受講の声かけ

こどもスペースのプレイセンターは、年間登録制で20組ほどの親子が参加しています。活動日は、毎週火曜日と木曜日。親が学ぶための講座は、年間10講座程度開催しています。

理念に基づいた活動を行っていきけるよう、こどもスペースの組織全体で学びの内容などに責任をもち、参加者の中から募った運営委員（4名程度）が日々の運営を行っています。運営委員は指導的な立場ではなく、参加者と協力して活動をつくり、率先して学ぼうとする役割を担っています。参加者をまとめていく苦勞もありますが、その分学びが深まり自分の成長も感じられるので、わが子がプレイセンターを卒業した後も運営委員を続ける人もいます。このような長く活動に携わっている運営委員に、さらに体系的に学ぶためにSV講座受講をすすめています。

### 4. 次世代SVの伴走～私の役割：運営委員のスーパーバイザーとして

日々の活動の場は、新しいSVを含む運営委員が責任をもっています。私は様子をみてはいますが、その場で指導することはありません。

活動の課題については、月に1度の運営委員会でじっくり話します。運営委員だけで話していると、係やスケジュールなど実務的な相談ばかりになったり、あそびの環境について話しても大人の都合が優先された方向にすすんでしまいがちになることもあります。

私は常に「子どもにとってどうなのか」「子どもの自由な遊びが保障されているのか」という目線からアドバイスしています。

「子どもは自分の力で必ず育つ」と思えるのは、プレイセンターに関わって20年にもなる現在の私だからです。現役で小さい子どもを育てている人たちが不安で、無意識にコントロールしようとするのは、当然でしょう。そんな時に「大丈夫。子どもに任せよう。」というのが、私の役割だと思っています。

### 5. プレイセンターの明日に願うこと

プレイセンターの良さを実感するには時間がかかります。

そのため「プレイセンターにはなるべく長く参加してください」と20年言い続けてきましたが、保育サービスが年々充実し、満4才まで在籍する子は少なくなってきました。

ところが、ここ数年新しいスタイルが生まれてきています。

親の復職に伴い保育園に入るけれど、プレイセンターの活動日に休みを合わせて活動を続けたり、普段は幼稚園に通っているけれど、集団保育を子どもが嫌がるので、プレイセンターにも来たりと、ダブルスクールのように活用する家庭がみられるようになってきました。プレイセンターで子どもも親も自分らしく過ごす時間を持つことで、もう一つの社会でも折り合いがつけられるようになるようです。

子どもと共に育ちたいと思う親は、確かにいます。プレイセンターは、選ばれる子育てと保育の場になっていけるとと思います。

そして子どもたちにはプレイセンターで、遊びを通して自分の人生は自分のものであることを経験してほしいと思っています。（→ 次ページ 遊びの画像を寄せていただきました）



### 遊びの素材「小麦粉」

小麦粉は形状・触感・香りとも、変幻自在な遊びの素材。こどもスペースのプレイセンターでは、定番の素材です。

この日、Kちゃんは粉に水を入れ、触っては、また粉を入れ、練っては、また水を入れ…、自分が満足するまでその変化を感じ続けました。

